講義ノート「人種の表象とリアリティ　第４回」　　2007 年 10 月 26 日

担当　高階絵里加（人文研）

西洋美術における異邦人表現の伝統―〈東方三博士の礼拝〉図像をめぐって

はじめに

問題意識：

・２１世紀のこんにち、生物学、遺伝学等の自然科学の分野においては、いわゆる「人種」概念の誤謬性が指摘されている。

・「過去数世紀にわたって使われてきて、今日の世界で私たちが理解している「人種」という概念に対応する生物学的実体はない」（ローリング・ブレイス「「人種」は社会的構築物か生物学的リアリティーか」『人種概念の普遍性を問う』京都大学人文科学研究所、2003, p.44）

・このような自然科学における研究の成果にもかかわらず、肌の色の差による「人種」の区分、とりわけ「白･黄･黒」（白人・黄色人種・黒人）の三分類は、一般的にはいまだにあるリアリティを持ち続けていると思われる。それはなぜであろうか？

・本講義では、西洋世界における人種の表象と表現の伝統を探るうえで、とりわけ視覚に強く訴えるものである芸術作品をとりあげる。

・なかでもキリスト教美術の中の〈東方三博士の礼拝〉の図像は、西洋美術の中で数多く絵画や彫刻に制作され、親しまれている図像のひとつであり、また「肌の色による人間の三分類」がある時代に典型的にあらわれる例でもある。

・もし〈東方三博士の礼拝〉図像が人種の三分類の概念形成に大きな役割を果たしており、その視覚芸術の伝統が今に至るまで人々の記憶に影響を与えているのであれば、それはどのような歴史・宗教的背景から生まれ、いかにして社会とかかわり、いかなる変遷を遂げていったのか？

素材・方法：

・現存する絵画・彫刻から、〈東方三博士の礼拝〉を表している作品を収集、三人の博士の容貌や肌の色の描かれ方の、時代や描かれた国による表現の相違を分析。

・先行研究も参照しつつ、キリスト教神学思想における〈東方三博士の礼拝〉の位置づけを、神学思想書などにより文字資料の上からも確認。

「注意」

①「異人種」ではなく「異邦人」をタイトルに用いた理由。

- 「人種」（英仏：race, 伊：razza,　独：rasse）
- 辞書などによれば、ほぼ 15 世紀以降に登場した言葉。

②造形芸術（絵画・彫刻など）をどう理解するか。

・西洋の歴史における視覚イメージの重要性、特にキリスト教会。

・必ずしも現実社会そのものの記録ではないが、言葉や数字ではうまく言い表すことのできない、ある「現実社会の経験」を表現。
・視覚表現の伝統的な約束事をふまえている。

〈東方三博士の礼拝〉とは
・Adoration of the Magi
・〈三王礼拝〉〈マギの礼拝〉とも呼ばれ、〈羊飼いたちの礼拝〉と並び聖書の中のキリストの誕生に関する二つの話のうちの一つ。
・東方より赴いた三人の賢者たちが幼子キリストを礼拝する逸話。

『マタイによる福音書』　二章
「彼ら王の言葉をききて往きしに、視よ、さきに東にて見し星、先だちゆきて、幼児のいますところのうえに止まる。かれら星を見て、よろこびに溢れつつ、家に入りて、幼児のその母マリヤとともにいますを見、ひれ伏して拝し、かつ宝の箱を開けて、黄金・乳香・没薬など礼物を捧げたり」

〈東方三博士の礼拝〉図像の歴史 ①
・「マギ」（magi)は、もともとは東方出身の占星術者、占い師、魔術師をあらわす。早い時代の図像ではミトラ教（印度・イランの古代神話に共通する太陽神[ミトラ]を崇拝する宗教。地中海世界を経てローマ帝国領土で広範に流布した）の衣装を身につけ、典型的な「フリュギア帽」すなわち先端が前方に折れている先細りの帽子をかぶっている。
・『マタイによる福音書』においては、彼らは占星術に優れた学者ほどの意味。

〈東方三博士の礼拝〉図像の歴史 ②
・三人のマギの姿について。
・『マタイによる福音書』の記述には、容貌や人数が書かれていない。その後、さまざまな神学的解釈により絵画や彫刻が生み出される。
・人数・・・3 世紀の神学者オリゲネスの解釈により、贈り物の数から人数が三人とされた。

〈東方三博士の礼拝〉図像の歴史 ②
・博士から王へ・・・3 世紀、キリスト教著述家のテルトゥリアヌス が『詩篇』の記述にもとづき、マギを王であるとする。
「タルシシと島々の王たちは贈り物をもたらし、シバとセバの王たちは貢物を入れるように」（71:10-11）
・キリストを「王の中の王」とする神学的解釈が裏づけ。

〈東方三博士の礼拝〉図像の歴史 ④
・三博士が王であるとの説は 5 ～6 世紀にほぼ定着、視覚芸術においては 10 世紀以降から 13 世紀ごろに完全に定着。
・年齢の差・・・老年、壮年、青年の三人の王に。ほぼ 8 世紀ごろに定着？？

東方三博士はどこから来たか

・聖書の記述では「東方」とあるのみ。アラビア、ペルシア、メソポタミア、バビロン、アレクサンドリア等々、聖書にもとづくいろいろな解釈が登場

・イザヤ書 60 :6「彼らはみなセバから来り、 黄金と乳香を運び､喜んでヤハウェの誉れあるわざを語る」「「セバ」アラビアの南西部」(『イザヤ書 （下）:旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1975､p.179.）

・詩篇 67 :30「いと高き者よ、エルサレムはあなたの宮、王たちはあなたのもとに贈り物をもたらす」「王たち」はエジプト､エチオピア､パトロスなどの支配者であろう」(『詩篇：旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1973､p.389.）

東方三博士と三大陸

・5 世紀になると、三人は異なる国より来たとされる。すなわち三人のマギは世界のユダヤ人以外のすべての人々を意味する解釈に。

教皇聖レオ（在位 440-461）「すべての人々は、三人のマギにおいて、全宇宙の創造主を崇拝する」

・さらに、3 人をアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸と結びつける考え方。

マタイへの注釈(8 世紀末)「三人のマギの神秘とはまた、世界の三つの部分であるアジア、アフリカ、ヨーロッパ、すなわちノアの三人の息子たちからその種を発する人種を意味しているということである」 （cf. TO 地図）

全人類としての東方三博士

・マギ三大陸代表説はおおよそ 5～12 世紀の間に徐々にヨーロッパ世界に定着。

・三人のマギの年齢と人種の区分により､〈東方三博士の礼拝〉図像は「あらゆる人類を包括する普遍的キリスト教」を象徴するようになった。

・造形芸術において､はっきりと年齢と人種の差を三つに区別した表現は、おおよそ 15 世紀あたりから登場。

黒い肌のマギの登場と受容①

・13 世紀前半、神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世（在位 1220-1250）の異国への関心。

三博士の遺骨をケルンに移したフリードリヒ･バルバロッサの孫｡祖父と同じホーヘンシュタウフェン家の出身でシチリア生まれ、ノルマン、ビザンティン、ムスリムの文化に触れて育った。一二二四年から翌年にかけてシチリアのイスラム教徒を大量に宮廷に呼び、個人的にも黒人の楽士や従者を雇っていたが、そこには神聖ローマ帝国の支配権が遠い異国にまで及ぶ広大な、普遍的なものであることを誇示する意味もあった。したがって、この皇帝はのちにしばしば黒人の従者を伴う姿で描かれている。

黒い肌のマギの登場と受容②

・北ヨーロッパにおける、聖マウリティウスの伝統。

伝説的な戦士聖人。エジプトのテーベ軍団の指揮者で、異教の儀式に加わることを拒んだ

ために、紀元 3 世紀に処刑された。絵画・彫刻では、主としてドイツとイタリア・ルネサンス期の作品に登場する。しばしば褐色の肌で描かれ（彼の名はラテン語“mauricus”「ムーア人」に由来）、ローマ兵士の服装をしている。

黒い肌のマギの登場と受容③

・ヨハネス・フォン・ヒルデスハイムの著書 *Historia Trium Regum*『聖三王伝説』（14 世紀後半）「カスパールは最も偉大であり（または背が高く）、黒いエチオピア人であったことは疑いを入れない」

・ プレスター・ジョンの伝説。東方に王国を建設したという中世ヨーロッパに流布した伝説上の人物。

黒い肌のマギの登場と受容④

・造形美術における黒人の登場。召使、従者、楽師など。

・15 世紀前半の、黒人のヨーロッパへの大量流入。

3 つの「人種」と 3 つの世代

・なぜ老年の王は常にヨーロッパ人なのか？

・〈人生の三段階〉と〈東方三博士〉

〈東方三博士の礼拝〉図像における異邦人表現の特徴

・異国への期待と憧れ

・黒人表象の両義的イメージ

「文明」に対する「未開」「野蛮」イメージ

「高貴な異国人」のイメージ

・〈東方三博士〉の黒人王は、世俗的な人種偏見からは超越した視覚表現として存続

まとめ

・〈東方三博士の礼拝〉図像に描かれる三人の異邦人（三博士）は、ある時代からその外見がはっきりと三つの典型として描きわけられるようになる。まず三人に年齢差が与えられ、次いで肌や髪の毛の色がはっきりと描き分けられる。ほぼ 15 世紀に黒い肌の王が登場するが、その背景には 3 世紀から１６世紀にかけてのキリスト教のヨーロッパへの広がりにともなって、三博士をキリスト教に帰依する世界の三大陸（即ち全世界）の象徴として表現しようとする、いわばキリスト教普遍主義ともいえる神学上の思想があった。

・〈東方三博士の礼拝〉では青年・壮年・老年の三博士がそれぞれアフリカ・アジア・ヨーロッパ大陸を象徴するとされ、さらに各博士の年齢は各大陸の文明の進度に呼応するというキリスト教会による世界諸地域の序列化が行われる。

・しかしながら、〈東方三博士の礼拝〉図像における黒い肌の王は、若々しい異国のキリスト教徒への期待とあこがれを視覚化したものであり、世俗的な人種偏見からは超越した視

覚表現として存続。

・結論：キリスト教における人種の表象の歴史とは西洋世界における他者認識の歴史にほかならず、〈東方三博士の礼拝〉はその一例としてとりわけ人種の典型的な三分類を視覚的に定着させ広めた図像として重要である。

＊主な参考文献

久保尋二　1990 『「マギの礼拝」図像研究』すぐ書房。
高階絵里加　2004　西洋美術における異邦人表現の伝統―〈東方三博士の礼拝〉図像をめぐって―　科研成果報告書『「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究（第一部）』京都大学人文科学研究所。
竹沢泰子　2003　「人種概念の普遍性を問う～問題提起」『人種概念の普遍性を問う　植民地主義、国民国家、創られた神話』京都大学人文科学研究所。
ブレイス、C・ローリング　2003「「人種」は社会的構築物か生物学的リアリティーか」『人種概念の普遍[1]性を問う　植民地主義、国民国家、創られた神話』京都大学人文科学研究所。

Carr, Dawson W.　1997. *Andrea Mantegna, The Adoration of the Magi*, Los Angeles: J. Paul Getty Museum.
Devisse, Jean & Mollat Michel. 1979. *The Image of the Black in Western Art Ⅱ, From the Early Christian Era to the "Age of Discovery" 2, Africans in the Christian Ordinance of the World(Fourteenth to the Sixteenth Century)*, Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.
Kaplan, Paul D. 1985. *The Rise of the Black Magus in Western Art*, Studies in the Fine Arts, Iconography, No.9, Ann Arbor: UMI Research Press.